村野藤吾による地形を活用した関西大学千里山キャンパスの建築

西田貫人

はじめに

関西大学千里山キャンパスは、一九二二年より現在まで一〇〇年近くの歴史を持っている。そのなかで建築家村野藤吾（一八九一－一九八四年）は、千里山キャンパスの計画に大きく関わった人物である。村野は一九四九年に大学院学舎を設計して以来、一九八〇年の関西大学第一高等学校校舎の設計に至るまで三一年間という長い期間に亘って、約四〇もの建物を設計してきた。

これまで関西大学千里山キャンパスにおける建築の特徴やそれらの変化についての研究[1]は継続的に行われてきたが、その多くの研究は、資料として年史編纂室や関西大学管財課所蔵の関西大学内の資料のみでなされてきたものであった。二〇一六年の佐川拳太郎[2]、小西圭[3]、辻尾修一[4]、津田一樹[5]らによる研究は京都工芸繊維大学美術工芸資料館が所蔵する「村野コレクション」の内、関西大学に関する村野・森建築事務所旧蔵の図面五八フォルダ、二一四八枚を整理、分析し、そこに記載されている内容について明らかにすると同時に、現存する建物（第三学舎、第四学舎、円神館、簡文館）の計画段階から実施に至るまでの変遷を追い、特徴を明らかにした。

本稿では、その図面の中から地形を活用したことがわかる図面として、等高線が描かれた平面図や敷地ごと切断された断面図、写真、言説といった資料を用い、千里丘陵という起伏の富んだ土地において、村野が設計を行った千里山キャンパスの建物の特徴を明らかにする。

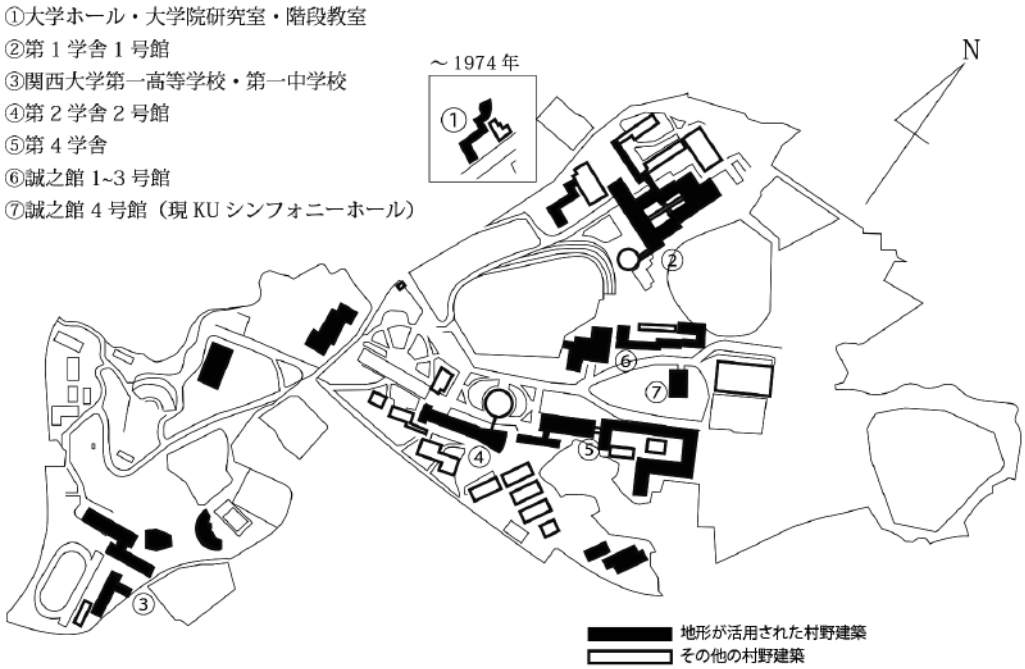

図１　1980年のキャンパス配置図

傾斜地に計画された建物

千里山キャンパスの村野建築において、竣工時に高低差のある地形に沿って建てられているものは二〇棟ほど確認ができる。その中から、いくつかの建物を取り上げていく。（図１）

①大学ホール・大学院研究室・階段教室

千里山キャンパス内で、一番初めに地形を設計に取り入れたことが確認できた村野建築は、大学ホール・大学院研究室・階段教室（一九五二年）である。この建物は、一九四九年に竣工した大学院学舎と、中庭を挟んで建つ赤い屋根と白い壁が特徴的な大学ホール、そこから北に伸びて接続する大きなガラス面と雁行状に配置された部屋を持つ大学院研究室、そしてさらに北西に扇状の階段教室を配置する構成となっている。この敷地は西から東にかけて高くなり、研究室は二階建てであるが、東の中庭からは平屋に見える。（図３）また、階段教室は土地の勾配に合わせた階段状になっている。階段教室について、雑誌『近代建築』で建築評論家の中真己は、「これは打ち放しコンクリートに白モルタルを吹きつけただけの質素なものである。西下りの斜面に直接

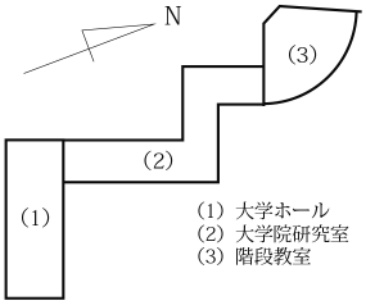

図２　大学ホール・大学院研究室・階段教室の配置構成

図３　東側（上）と西側（下）で階数が異なって見える大学院研究室

めり込んだように建てられている。西側の道路から見ると、雑草や灌木が生い茂って取り囲んでいて一種独特の雰囲気がある。自然の一部になろうとしているかのようである～中略～わざと建物の周囲を人工的に手を加えずに雑草を生い茂らせたままにしておくというデザインは建築の方をどうするかということで非常に難しいテーマである。これをあえてやってのけている点に、村野藤吾のデザインに対する一つの面が表れている。これについて予算がなく外回りに手がつけられていないのだとはどうしても考えられない。明らかにこの効果を意識しているように見える。[6]」と述べている。

階段教室は、エスキースの段階では扇の要部分が東を向いていた図面もみられるが、最終的に、その図から時計回りに一六〇度ほど回転したものとなっている。他に、等高線が赤線で描かれたエスキースも存在する。階段教室が建っている敷地は周りより少し複雑である。その中で、その位置から配置を変えず回転させた理由として低い位置に教壇を設け、地形にあわせて座席を配置する計画によるものであることがわかる。

②第一学舎一号館

第一学舎一号館（一九五五年）は、もともと大学本館や威徳館が建っていた位置に、三期の工事に分けて建てられた。正面に東西に長い、柱とタイル貼りの腰壁、開口部で構成された低層棟とその背後に白い壁でできた教室棟（一期工事）と一番奥の大講義室棟（二期工事）が中庭を囲む構成されている。低層棟（三期工事）は敷地が変化する場所に橋を架けるように配置され、（図5）奥への下り坂

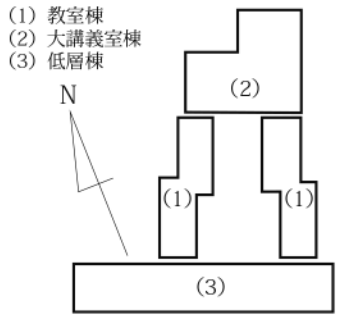

図４　第１学舎１号館の構成

図５　西側から東へかけて３階建てから２階建てとなる第１学舎１号館の低層棟

部分がピロティ状となっており、通り抜ける際の視覚的な広がりも演出している。この構成は後に、第一学舎一号館の西側に接続して建てられる法文学舎研究室一号棟でも用いられた。また、講堂部分は計画案ではどれも竣工時より少し西よりに配置されている。これらは、等高線にあわせて出来るだけ造成を避ける設計を行われていたと考えられるが、竣工時では、講堂部分の横に大型教室を配置したことにより計画案より東にずれたものとなった。

③関西大学第一高等学校・第一中学校

一九五三年になると起伏の富んだ千里山遊園の跡地に第一高等学校・第一中学校の校舎建設が始まった。遊園時代の運動場と観客席をそのまま用い、その上部の北に向かって小高くなっている敷地に第一高等学校の校舎は、足元の地形を残したまま、白い壁にスパニッシュの瓦葺きの建物として建設された。（図7）一九五五年には、体育館兼講堂として、六角形の平面に白壁に赤い瓦葺きの景風館が建った。この景風館は南側の勾配の険しい敷地に張り出したテラスを持ち、テラスと生い茂る木を高低差を利用して同じ高さにしたかったと考えられる。一九五七年には景風館の東に第一高等学校の校舎が増築され、北東には小高い山状の敷地に沿って扇型の第一中学校校舎が建てられ、二棟は高い位置に建つ中学校舎の一階部分と高校校舎の二階部分を外廊下で接続していた。この増築は、第一中学校校舎と共に設計されており、計画案では等高線に沿って比較的緩やかな場所に、第一中学校と高校の校舎を配置しながら接続する案が見られたが、竣工した建物は、険しい地形の特徴を生かしたものとなっている。その後、一九六六年には第一高等学校理科特別教室が建ち、一九八〇年には千里山キャンパスで最後の村野建築となる第一高等学校新校舎が高校校舎の一部を解体し建てられた。新校舎は計画段階から東西に伸びる長い建物を緩やかに地形になじませており、二つのブロックの繋ぎ目に作られたピロティーは景風館の前につながる大階段と接続している。

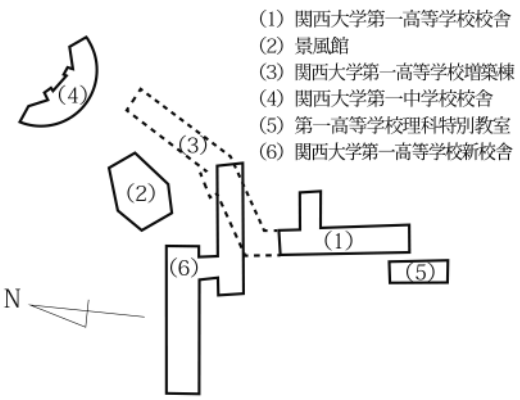

図6　関西大学第一高等学校・第一中学校校舎の配置構成

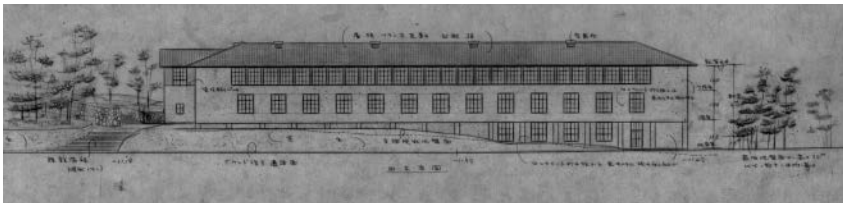

図7　第一高等学校　立面図　AN.5152-Ⅰ-05（一部抜粋）

④第二学舎二号館

一九五七年には第二学舎二号館が、起伏のある難しい地形の上に東西に細長く計画された。ファサードは白モルタル塗りの躯体、ガラス窓、赤褐色タイルの三つの要素を取り込んだデザインとなっており、教室部分は細く柱梁が白く塗られており、その間を窓とタイルで埋めるという構成をとっている。講堂部分はコンクリート打ち放しの荒々しい仕上げとなっており、階段教室と同じような雰囲気を感じる。そして最西部の六階建ての個人研究室棟部分は褐色のタイルがはられている。建物の足元は、第一高等学校校舎と同様にもとの地形を残し、小高い丘の上に置いたような計画（図8）となっており、竣工当初は大教室部分から講堂前にかけて盛り土を利用したスロープをアプローチとしていたが、工学部や円神館ができ、利用学生の増加、動線上の不都合のため階段に変更された。

⑤第四学舎

一九六〇年に第四学舎一号館が第二学舎二号館の東側に竣工する。鉄筋コンクリート造地下一階地上五階建てで、第二学舎と二階渡り廊下で連絡され、一階は柱のみのピロティーとなっていることで、南の工学部実験場の方へ視線が抜けるようになっている。また、そのピロティーにはガラス張りのエントランスが設けられていた。外観はコンクリートの柱梁を露出させ、その間に白タイルと窓を入れる構成でできている。

第四学舎一号館の南側は険しい勾配となっており、人工のバルコニー状に床を張り出す手法が用いられている。（図10）

続いて、一九六四年から一九六九年にかけて第四学舎二号館・第四学舎二号館研究棟が竣工する。二号館は一九六四年に一期工事が終わり、一九六六年に二期工事、一九六八年に三期工事を行い、一九六九年に最後の研究棟が竣工する。外観の構成は一号館と同じである。

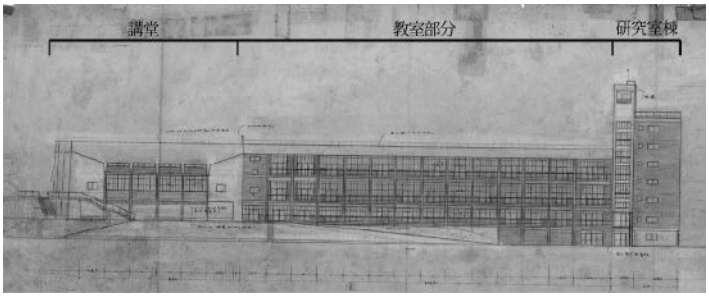

図８　第２学舎２号館　立面図　AN.5158-102（一部抜粋、加筆）

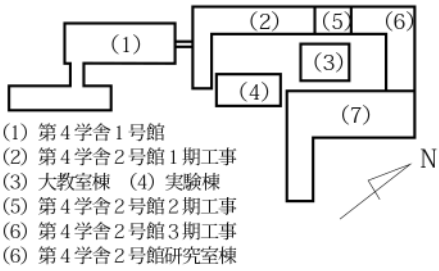

図９　第４学舎の配置構成

図10　第４学舎１号館の傾斜へ張り出す床面

一期工事で作られたピロティーの先は下り坂となっており、ピロティー越しに実験棟と大教室棟の間から視線が抜けるようになっている。また、三期工事以降の建物は、高さの変化する斜面地に出来るだけ少ない切盛土を行い建てられている。（図11）

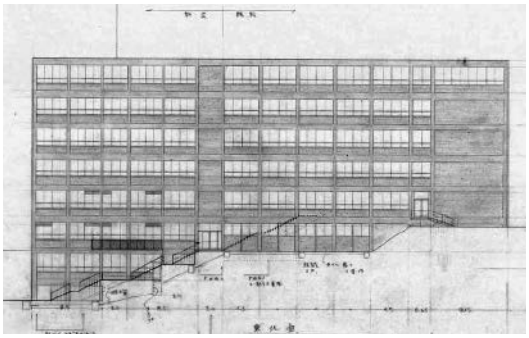

図11　第４学舎２号館３期工事・研究室棟　立面図
AN.5165-17（一部抜粋）

⑥誠之館一～三号館

誠之館一号館（一九六二年）は旧中央グランドの東側のあたりに建設されていたが、一号館は鉄筋コンクリート造二階建てで、一階は総ガラス張り、二階はセメントレンガが白目地で積まれた壁とガラスによるファサードとなっている。竣工時、西側入り口前のアプローチは石を積み上げてコンクリートで固めた荒々しい階段となっていた。自然との共存・関係性を考えた村野の様子が伺える。二号館（一九六二年）は会議室・学生課・厚生課などが入っていた建物で、外壁の裏貼りされたタイルが特徴的である。三号館（一九六二年）は鉄筋コンクリート造四階建のクラブの部室である。一階は少しセットバックさせたアーケードとなっている。一九六八年には誠之館一号館新館・三号館新館が竣工した。一号館新館は一号館の西に食堂・厨房・学生課・購買部の拡充のために増築された。三号館新館は白壁のコの字型で、部室棟と会議棟端の二棟を繋ぐように配置され、この建物も中庭に面する一階はアーケードとなっている。

南側の一・二号館は低層の建物で高低差の低い位置に配置し、奥の地形の高い位置に高い建物を配置する計画は、同時期に設計された甲南女子大学と通ずるところがみられ、中庭にある庇も非常に似ているものが用いられている。また、二階部分は地形の高くなっている場所からもアクセスができるようになっており、そこから建物を見ると、平屋のようにも見える。（図13）

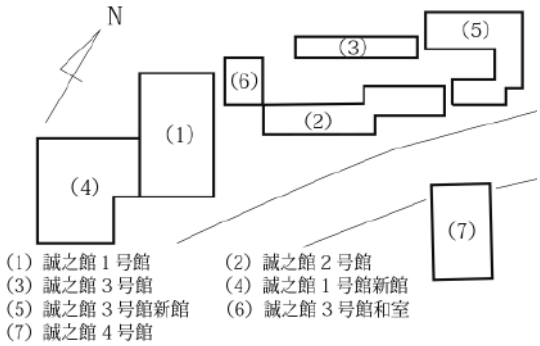

図12　誠之館の配置構成

図13　グラウンド側からは平屋に見える誠之館１号館

⑦誠之館四号館（現KUシンフォニーホール）

誠之館一～三館が竣工する同年（一九六二年）には、五〇〇人が入る映画・音楽・演劇のための講堂として誠之館四号館が建設された。

小高い丘に埋め込まれたように建っており、村野特有の地から生えて一体化するような、自然との共存が感じられるデザインとなっている（図14）。また、内部のオーディトリウムが外部の勾配に合わせた階段状客席となっている。この手法は階段教室（一九五二年）でもみられ、敷地の地形を活かした内部の設計がされており、その地の特性をたくみに利用している。

四号館の計画案は実施案とあわせて二種類しかみられない。採用されなかった案は多角形の計画であるが、内部のオーディトリウムは実施同様に敷地の勾配に合わせた階段状客席が計画されていた。

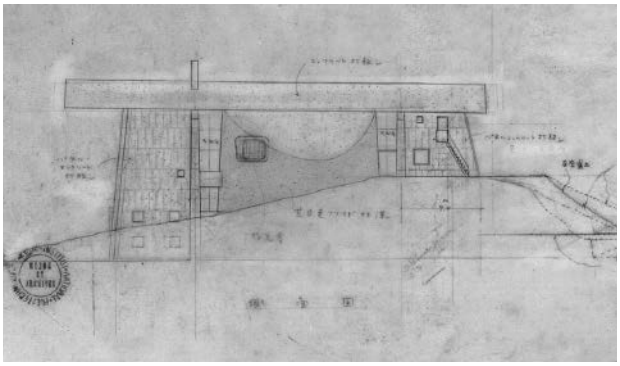

図14　誠之館４号館　計画案　立面図　AN.5150-６
（一部抜粋）

村野による地形の活用

千里山キャンパスは、地名のとおり丘陵となっており、当時の計画敷地内には、小高い丘のようになっている場所や崖地のような場所が多く含まれていた。村野は設計を行うにあたり「ブルドーザーを入れるのは最小限にしたい[7]」と述べている。また、他の案件ではあるが、箱根樹木園の設計の際に「土地と建物の境界線がはっきりしないでしょう。あれは木や草を植えて。自然にできたものです。つまり建物というものは普通、土地の上に建っている。土地の上にずばっと建ったというのが近代の考え方ですが、そうじゃなくて自然と建物と土地とが平和的に、和やかにつながるというのが私の作品にはみな出ています。土地と建物がけんかしないようにする[8]」また、西宮トラピスチヌ修道院では「建物はかなり高低差のある地形にそってなるべく自然な形で土と接するように心がけた。まわりの美しい自然環境と建物が一体化するようなものであること[9]」というように述べており、設計を行うにあたり大掛かりな造成をできるだけ避け、周りの環境を大事にしていたことがわかる。

実際に千里山キャンパスでどのように起伏のある地形の特徴を取り込みながら建物の設計を行っていたかをみると、大きく3つに分類できる。①大学院研究室や第四学舎二号館などでみられた、高さの変化する斜面地にそのまま建物を建て、平面計画によって対応する。（図15-①）これは、大掛かりな造成を避けるとともに、工事費を下げるという狙いも考えられる。千里山キャンパス内の傾斜がある敷地に建つ多くの建物で用いられている。また、村野は「高い建物はなるべくならば建てないように出来ないものか、なるべくならば低い建物のほうがいい。～中略～低い建物の方がわたしはいいと思う。というのは、圧迫したり、圧倒的な形をとったりすることをできるだけ避けたい[10]」と述べており、大学院研

究室や誠之館一号館のように敷地の高い側に中庭や通路を設けることで、部屋数を確保しつつも平屋や階層を低く見せるのにも効果的である。他にも、②階段教室や誠之館四号館のような、建物内部の平面計画を地形の高さの変化に合わせた計画（図15-②）や、③景風館や第四学舎一号館のように特に勾配が険しい場所においては、床を張り出し柱で支える（図15-③）といったものが見られ、この構成が用いられる際、図面では張り出した先に樹木が描かれており（図16）、樹木と建物の高さを意識していたと考えられる。

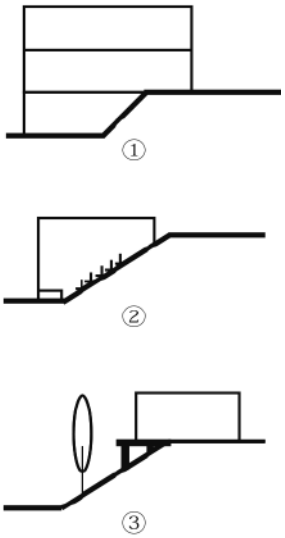

図15　地形活用の分類

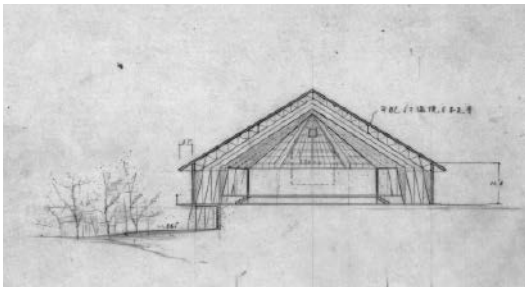
図16　景風館　断面図　AN.5152-Ⅰ-04（一部抜粋）

地形を通して紡がれた千里山キャンパスの建物

千里山キャンパスの建物は、しばしば他大学に比べ、建築の統一性や様式性がないといった話を耳にする。しかし、高低差のある敷地という問題に対し、単純に大規模な造成を行うのではなく、積極的に取り入れ活用しようという計画は、初期の大学院研究室から後期の第一高等学校新校舎に至るまで、長きにわたり千里山キャンパスの建物において一貫して考えられてきた特徴である。近年、これらの建築を含む村野建築は大学の取り巻く環境や求められる機能によって次々と建て替えられている。村野建築の評価の高まりの一因としては、今日の環境との共存に対する価値観に通ずる点があると思える。必要な建て替えもあるが、起伏に富んだ千里山キャンパスで、今後計画される建物に関しても、大規模な造成を行うのではなく、村野が築き上げてきた地形を取り込むという千里山キャンパスの特徴・意思を引き継ぎ設計されるべきなのではないであろうか。

注

① 西田佳代著「平成五年度三月修士論文　関西大学における村野藤吾の建築」山本修平著「平成一八年度三月期卒業論文　村野藤吾の関西大学における初期作品に関する研究」三村健二著「平成一七年度三学期卒業論文　消失したものから見た関西大学千里山キャンパスの変遷」

② 佐川拳太郎著「平成二七年度三月修士論文　京都工芸繊維大学所蔵「村

野コレクション」から見る関西大学の建築――図面の特徴と設計過程について――」

③　小西圭著「平成二七年度三月期卒業論文　関西大学千里山キャンパス第四学舎の意匠の特徴――村野藤吾の図面と記述を中心に――」

④　辻尾修一著「平成二七年度三月期卒業論文　大正期以降の関大一中・一高敷地の変遷――千里山花壇から大学キャンパスへ――」

⑤　津田一樹著「平成二七年度三月期卒業論文　村野藤吾の関西大学簡文館・円神館の設計に関する研究」

⑥　中真己編集　関西大学の建築群をめぐって――村野藤吾論覚書――　近代建築　発行　昭和三九年一月

⑦⑩　再録　竹中工務店「approach」　特集　学校建築　関西大学を中心に村野藤吾氏にきく　一九六五年春号所収

⑧⑨　村野藤吾著　村野藤吾著作全集　全一巻　鹿島出版社

参考文献

「対談、学校建築シンポジウム・現代の学校建築の総合計画」近代建築　発行　昭和三九年十一月

橋寺知子著　多様でやわらかなキャンパスを求めて――関西大学千里山キャンパスの１００年と村野藤吾　関西大学大学時報　二〇二〇年一月号

画像出典

写真　関西大学年史編纂室蔵

図面　京都工芸繊維大学美術工芸資料館「村野コレクション」蔵　キャプションにて整理番号を記載